

しまざるものは、實に所謂回鶻文字を以て書かれたるが故に外ならざるは、⁸⁶⁾ Radloff 氏の明らかに述ぶる所なり、されば此等の古き回鶻文・回鶻字として知らるゝ文記にして、諸種の條件より見て、必ず唐代のものと認めらるゝものゝ大部分は、實は回鶻人が回鶻語を回鶻字にて書記したるものには非ずして、此の地方に在りしトルコ族が、かの突騎施にて遅くも八世紀の前半時代に使用したると同一の文字、即ち新ソグド文字と稱すべきものを用ゐる居りて、之によりて當時の南方トルコ語の文語を寫出したるものと見ざる可らず、而して回鶻人が高昌地方に出づるに至りしは九世紀の後半期、即ち唐の懿宗の咸通七年（八六六年）よりの事なれば、其の移徙の初に當りては、彼等は尙從來用ゐたる突厥字を使用したるものなるべきが、⁸⁸⁾ 後漸次此の地方の同種族の間に行はれたる文字にして、筆を用ゐて紙上に書記する便に於ては、遙に突厥文字に優れる新ソグド字を使用することゝなり、遂に從來の突厥字を棄つるに至りしに外ならざるが如し、されば要するに此の文字を回鶻文字と稱するは、回鶻の高昌地方に移徙して、之を使用するに至りしより後の時代、即ち九世紀の後半以後に於て初めて妥當なるべきと共に、此の時代以前に於て同一の文字を以て書寫せる古代トルコ語の文記は固とより多かるべきが、之に對しては後のソグド字、新ソグド字若しくは古代トルコ字等何れの名稱を附するも妨げざるべしと雖、獨り從來行はれたる回鶻文字の名稱を以てすべきに非るなり。

註① “Brilwa Ssadscha-Bandida jän gargaksen mongol üssük.” Klaproth, Sprach u. Schrift der Uiguren, S. 57 に據る。

② Inscriptions de l'Orkhon, p. 53.

③ 天寶四載に當る。此の年代は Schlegel 氏の報じたる所に據りたるものなるも Schlegel 氏の考の取るに足らざるは本論文集上卷二七八頁、註五八に於て述べたるが如し。